

第24回大学教育研究フォーラム
参加者企画セッション

学修成果の多角的・継続的な可視化とその活用 ー育成と一体化した評価への試みー

事例報告 1



×

ベネッセ教育総合研究所

2018年3月21日（水）

塩崎 俊彦（高知大学）

松本 留奈（ベネッセ教育総合研究所）

何をどのように評価するか？

ディプロマ ポリシーの分類	具体的な能力		評価方法	
【知識・理解】	対課題	専門分野に関する知識	GPA	
【思考・判断】		人類の文化・社会・自然に関する知識		
		論理的思考力		
【技能・表現】		課題探求力		
	語学・情報に関するリテラシー			
【関心・意欲・態度】	対人	表現力	ルーブリックによる 学生の自己評価	
		コミュニケーション力		
	協働実践力			
統合・働きかけ	対自己	自律力		パフォーマンス評価
		倫理観		
統合・働きかけ		上記の諸能力を内的に統合し、周囲の文化・社会・自然・人間などに外的に働きかけていく能力		

「10」の力

「+1」の力

ディプロマ・ポリシーに基づいた10 + 1の能力評価指標

セルフ・アセスメント・シート（平成29年度入学生まで）
セルフ・アセスメント・シートに基づくルーブリック
 （平成30年度入学生から）

アセスメント設計のプロセス

平成24年

セルフ・アセスメント・シートの実施

平成28年

3つのポリシーの見直し

平成29年

セルフ・アセスメント・シートの改訂
大学生基礎力テスト（ベネッセiキャリア）の導入

卒業生インタビュー調査

（ベネッセ教育総合研究所との共同研究）の実施

平成30年

セルフ・アセスメント・シートに基づく
ルーブリックの運用

① 育成したい人物像と
「成長」の定義

② 成長を評価する指標体系
の検討

③ 評価ツールの開発

初年次科目（必修）
大学基礎論・学問基礎論
課題探求実践セミナー

汎用的能力を測定して
授業改善・教育改善へ

ディプロマ・ポリシーに
則した能力評価指標の策定

4領域から対課題・対人・
対自己の10+1の能力へ

AP事業

④ 評価の実施

⑤ 結果の検証

e-ポートフォリオによる
アセスメントの可視化

一部

①
育成したい
人物像と
「成長」の定義

学科・コースのDPの見直し

【知識・理解】 【思考・判断】

【技能・表現】 【関心・意欲・態度】

【対課題】 【対人】 【對自己】 の

10 + 1 の能力に展開

10 + 1 の能力について、
「何ができるようになって欲しいか」
能力評価指標の策定

学科・コースでは
統合・働きかけのルーブリックを
策定

②
「成長」を
評価する
指標体系の検討

セルフ・アセスメント・シート

アクティブラーニングの能力評価指標
論理的思考力・課題探究力・協働実践力・表現力

改訂版セルフ・アセスメント・シート

【対課題】

論理的思考力・課題探究力

語学／情報に関するリテラシー

【対人】

表現力・コミュニケーション力・協働実践力

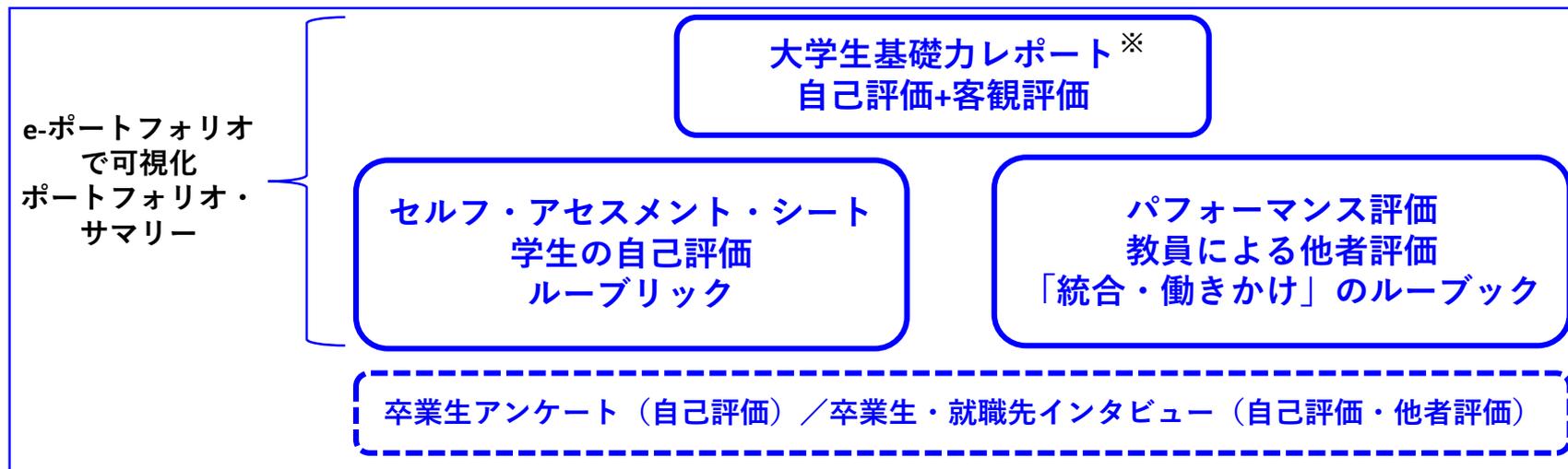
【對自己】

自律力・倫理観

【統合・働きかけ】

ルーブリック（自己評価）の運用へ

③ 評価ツールの開発



自己評価と他者評価の乖離

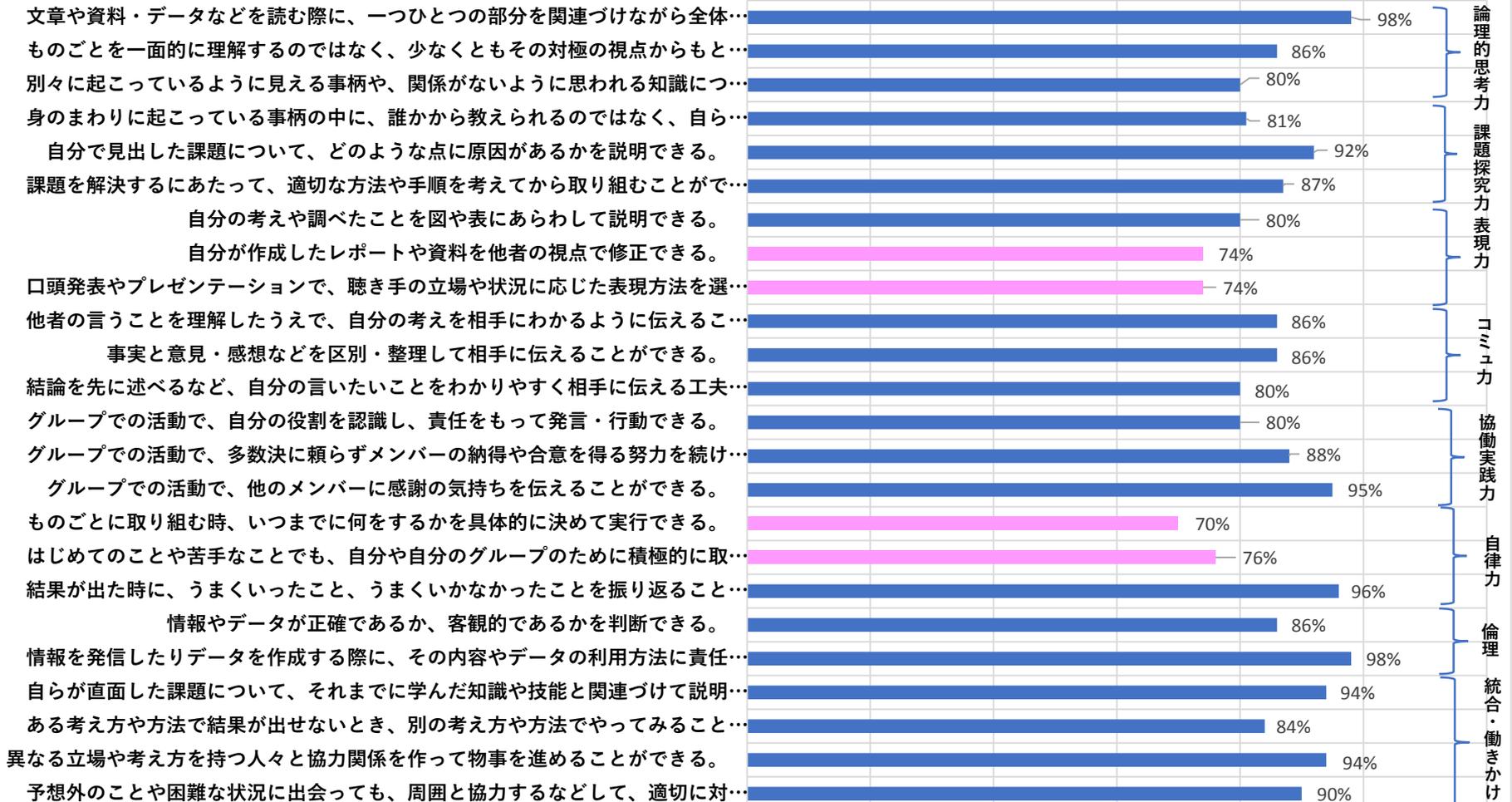
※ベネッセi-キャリア提供

企業関係者・高等学校関係者とのカリブレーション

- 「何のために評価するのか」が明確に示されている。
- 評価のモノサシが明確に示されている。
- 評価者と学生が評価について話し合う時間が確保されている。

セルフ・アセスメント・シート

平成29年度入学生 授業後のアセスメント n=52

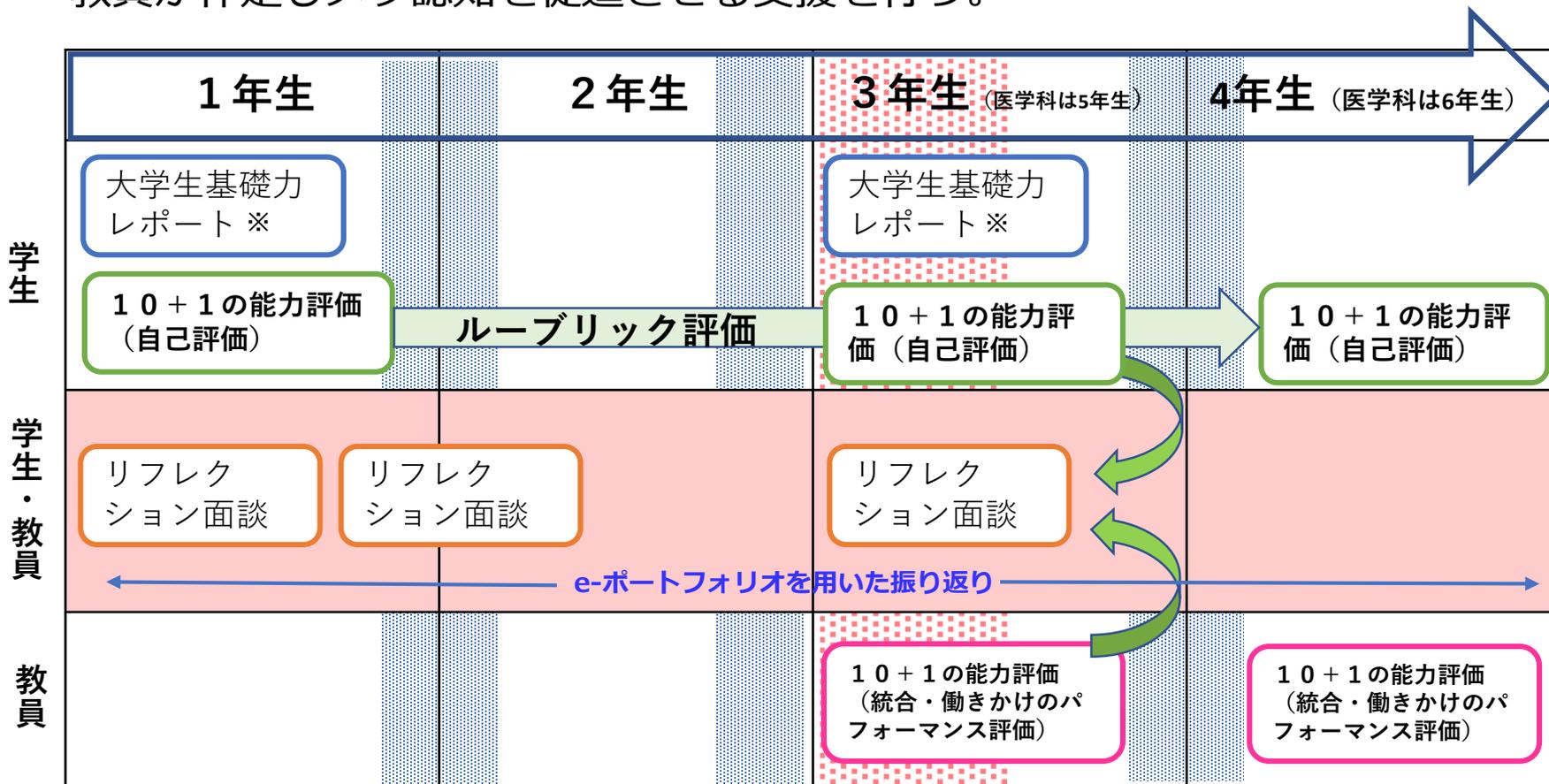


④ 評価の実施

アセスメントとリフレクション面談（形成的評価）のスケジュール

【リフレクション面談の目的】

学生たちが生涯学び続ける学修者として自己を評価する視点を獲得するために、教員が伴走しメタ認知を促進させる支援を行う。



卒業生インタビュー (平成29年)

⑤－1 評価の検証

1. セルフ・アセスメント・シートにおける探索的因子分析

セルフ・アセスメント・シートの24の設問は、
【対課題力】 【表現力・コミュニケーション力】
【協働実践力】 【対自己能力】
の4因子構造であった。

2. 大学生基礎力レポート[※]とセルフ・アセスメント・シート結果の全体的な相関

セルフ・アセスメント・シートの結果は、大学生基礎力レポートの【自己管理】 【対人関係】 【計画・実行】と親和性が認められる。

3. 1年次成績と大学生基礎力レポート結果による相関

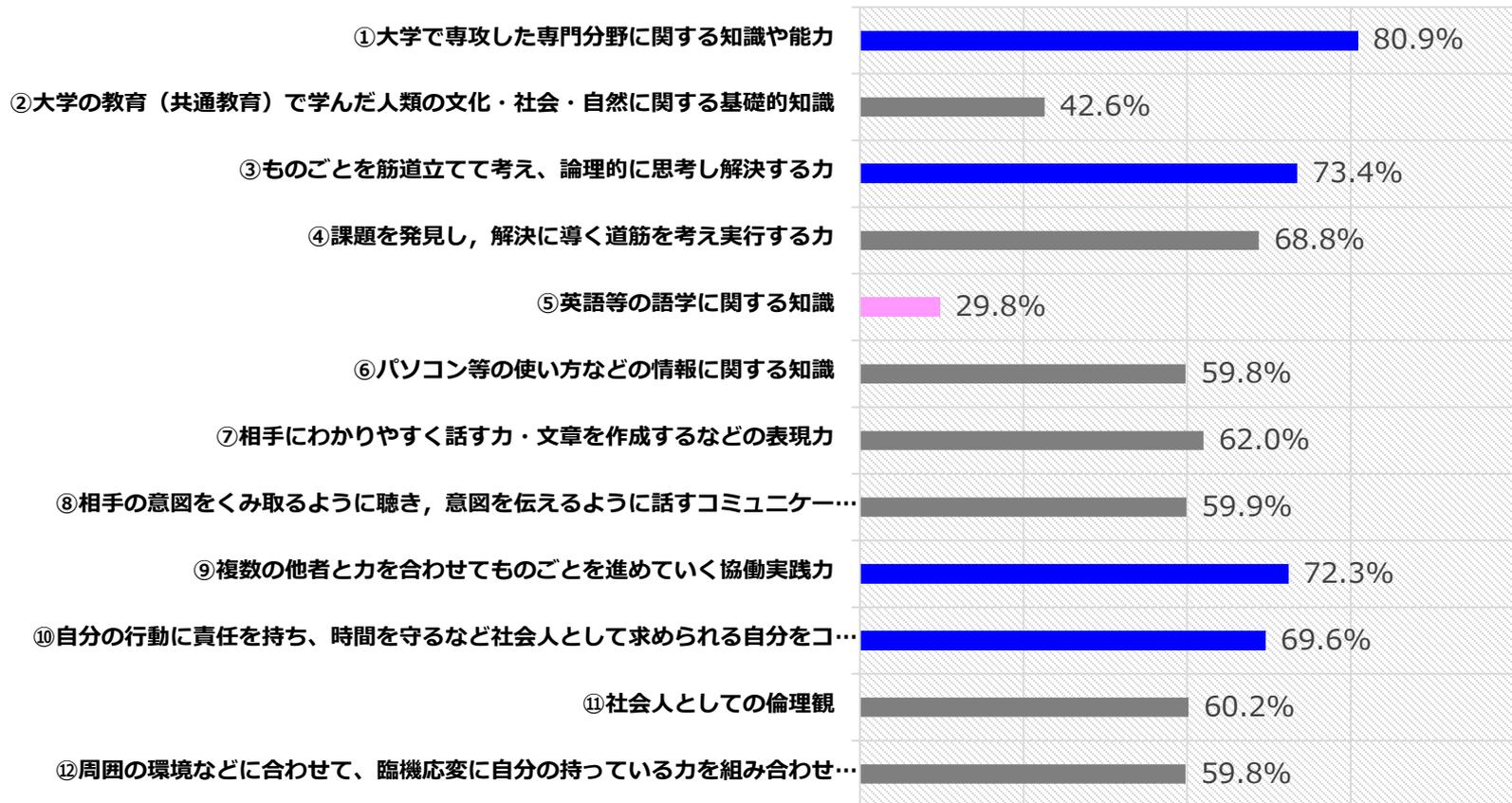
1年次の成績（評点平均）と大学生基礎力レポートの間には中程度の相関が見られる。

⑤-2 評価の検証

卒業後1年目アンケートの結果 1

実施期間：平成28年12月～平成29年1月 実施方法：質問紙（郵送）
送付数：1,071 回答数：210 回答率19.6%

本学が育成しようとする能力が、身に付いた+どちらかというと身に付いた



⑤-3 評価の検証

卒業後1年目アンケートの結果 2

本学が育成しようとする能力がどのような場面で身についたかについて、ゼミ・卒業論文・研究を挙げた者が多い。また、「教員の情緒的サポート」と「表現力」「コミュニケーション力」「協働実践力」には弱い相関が見られ、ゼミ等の実践的な場面での教育効果が想定される。課外活動の影響は大きいものと推察されるが、それに比べて、本学が力を入れてきた学生を地域活動へと誘因する準正課活動については、認知度が低くあまり影響を与えていない。

	1. 共通教育	2. 学部での専門教育（講義）	3. 学部の実験・実習・演習	4. ゼミ・卒業論文・卒業研究	5. 準正課活動（コラボ 考房プロジェクト等）	6. インターンシップ	7. 部・サークル活動	8. アルバイト	9. 留学経験	10. その他	記入なし
①大学で専攻した専門分野に関する知識や能力	4	59	21	67	0	0	2	0	1	3	32
②大学の教育（共通教育）で学んだ人類の文化・社会・自然に関する基礎的知識	61	18	2	9	1	0	3	2	1	1	101
③ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力	3	35	16	71	3	2	11	1	0	3	51
④課題を発見し、解決に導く道筋を考え実行する力	1	22	15	68	4	3	16	1	0	6	58
⑤英語等の語学に関する知識	37	15	1	17	0	0	1	1	11	5	117
⑥パソコン等の使い方などの情報に関する知識	40	23	9	45	2	0	2	4	0	6	68
⑦相手にわかりやすく話す力・文章を作成するなどの表現力	6	21	13	64	2	1	9	4	0	5	69
⑧相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力	9	10	21	34	1	4	21	12	1	9	71
⑨複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力	8	13	31	30	4	1	38	7	1	8	52
⑩自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力	2	6	24	24	0	3	34	36	2	8	52
⑪社会人としての倫理観	4	9	7	26	0	4	21	38	0	11	73
⑫周囲の環境などに合わせて、臨機応変に自分の持っている力を組み合わせて、他者に働きかける力	4	6	13	29	1	1	39	17	0	11	75

⑤-4 評価の検証

1. 大学生基礎力レポート[※] 1年時と3年時の比較

全国平均との比較による、成果・課題の確認。

※ベネッセi-キャリア提供

2. 卒業生インタビュー調査（ベネッセ教育総合研究所と共同研究）

セルフアセスメントシートの項目にしたがったインタビューを実施。

大学生基礎力レポート※の結果

※ベネッセi-キャリア提供

入学時

在学中

大学生基礎力レポートⅠ【1年生】

大学生基礎力レポートⅡ【3年生】

①大学入学時点の 学生の状態がどうか

学力、協調的問題解決力は全国平均より高い。

- 基礎学力（偏差値）
全国平均49.8<高知大57.9
- 協調的問題解決力（達成率%）
全国平均53.0<高知大55.9

Input Environment

②大学が提供している教育・学習環境は適切かどうか

カリキュラム・教員の満足度が全国平均より高い一方で、就職への満足度が低い。

- 満足度（とても+まあ%）
カリキュラム 全国平均68.4<高知大75.7
教員 全国平均69.7<高知大78.4
就職支援 全国平均58.9>高知大54.7



④学修成果はでているか

協調的問題解決力は全国平均より高い。

- 協調的問題解決力_能力評価（達成率%）
全国平均49.1<高知大59.1
- 協調的問題解決力_行動的評価（達成率%）
全国平均51.4<高知大55.2

Outcome/
Output

③学生は学習に傾倒しているか

自習時間や学びの取組みは全国平均を上回る。

- 週あたり自習時間（4時間以上の%）
全国平均33.2<高知大55.4
- 学びの取組み（達成率%）
全国平均56.9<高知大60.7

Engagement

Between 2013 10-11月号 P33

愛媛大学 山田剛史准教授（現京都大学准教授）

「学びと成長を促すアセスメントデザイン」より

共同研究 卒業生インタビュー

目的

1. 高知大学卒業生が、社会でどれくらい活躍できているか？
2. 卒業生の社会での活躍に、大学教育はどのくらい貢献できているか？
3. 社会で活躍する卒業生を育成するために、大学教育は何をどのように改善・強化すればよいか？

対象

卒業後1～5年目※までの、
高知県内および首都圏就職者と職場の方（上司）のペア 29組

※第2期中期目標を考慮した期間

地方大学の課題
県内と県外就職者の
差異を確認する

主観評価の課題
客観的にも確認する

●首都圏 就職者 10名

専攻	出身地	1年目	2,3年目	4,5年目
文系	県内		3	1
	県外	1	1	1
理系	県内			
	県外	1	2	

●高知県内 就職者 19名

専攻	出身地	1年目	2,3年目	4,5年目
文系	県内	2	2	4
	県外	2	2	2
理系	県内	2	1	
	県外	1		1

卒業生への評価（事前アンケートの傾向）

●ヒアリング対象者事前アンケート（セルフアセスメントシート）より見えてきたこと

★N=29のため、統計的に有意ではありません

全体の傾向

主観・客観ともに高い項目

- グループでの活動で、活動に貢献してくれた他のメンバーに感謝の気持ちを伝えることができる

主観・客観ともに低い項目

- 別々に起こっているように見える事柄や、関係がないように思われる知識について、共通点や背景などを考えながら、関連づけて理解することができる
- 自分の考えや調べたことを図や表にあらわして説明できる
- 自分が作成したレポートや資料を他者の視点で修正できる

主観と客観のギャップ

主観<客観の差が大きかった項目

- はじめてのことや苦手なことでも、自分や自分のグループのために積極的に取り組むことができる
- グループでの活動で、自分の役割を認識し、責任をもって発言・行動できる
- 結果が出た時に、うまくいったこと、うまくいかなかったことを振り返ることができる
- 口頭発表やプレゼンテーションで、聴き手の立場や状況に応じた表現方法を選択できる

全体的に主観<客観の傾向の中で、主観>客観となった3項目

- 情報やデータが正確であるか、客観的であるかを判断できる
- 情報を発信したりデータを作成する際に、その内容やデータの使用方法に責任を持つことができる
- ものごとを一面的に理解するのではなく、立場を変えて、その対極の視点からもとらえることができる

卒業生への評価（職場のコメント）

● 職場の方からのコメント例

評価ポイント

グループでの活動で、活動に貢献してくれた他のメンバーに感謝の気持ちを伝えることができる
元々専門的な勉強をしている者もいれば全くそうではない者もと色々なメンバーがいる中で、卒業生は今まで勉強していなかった側で周りから教わることも多かった。そんな中で**自分は教わっていると周りに配慮しながらやっていることはよくわかった。**

はじめてのことや苦手なことでも、自分や自分のグループのために積極的に取り組むことができる
基幹システムを入れ替えていただくためには、直近の売りに繋がらなくてもお客様を継続的にフォローしていく必要がある。卒業生はそういったことを**チームとしてどうしてあげればいいのかを継続的に考えられる能力がある。**

結果が出た時に、うまくいったこと、うまくいかなかったことを振り返ることができる
スロースターターで初めの頃はうまくいかなかったこともあったと思うが、それに対してちゃんと受け止めて、**どうしたらいいのかをしっかりと振り返って考えてきたから、成長してきてくれたのではないかと思う。**

チームで協働する

振り返り次につなげる

課題ポイント

別々に起こっているように見える事柄や、関係がないように思われる知識について、共通点や背景などを考えながら、関連づけて理解することができる
今やっていることがいろんなところに関連するということがまだまだわからない部分があるのではないかと思う。会社に入って「初めてのことばかり」と感じているようだが、**実際はそうではなく身近にあるものなので、その紐付けができる**とよい。**業務だけではなく、もう少し社会全体を俯瞰的に見られるとよい。**

情報やデータが正確であるか、客観的であるかを判断できる
情報を発信したりデータを作成する際に、その内容やデータの利用方法に責任を持つことができる
ある情報やデータについて「正しいです」と言えるかという、**裏付けがないので言うことができない。**もう1年2年経験を積めば、しっかりできると思っている

自分が作成したレポートや資料を他者の視点で修正できる
自分の考え・思考を相手に理解していただく、伝えるということが課題になると思う。なぜその機能が必要かを相手に納得してもらえ、相手の共感を得て承認を得る伝え方が今後必要になると思う。

全体を俯瞰する

エビデンスをもつ

相手を動かすコミュニケーション

インタビュー調査結果（全体）

高知大学在学中に学生が感じた魅力

- ▶ 卒業生は、高知大学の「**県外出身者8割**」の環境を大きな魅力として評価している。
- ▶ 高知県人の“**開放的**”な気質が、県外出身者の「**高知県への愛着**」を育てている。

高知大学のプログラムの課題

- ▶ 大学の**準正課の地域振興活動**に「**参加しておけばよかった**」との卒業生の意向は高い。

卒業生に対する企業の期待

- ▶ 高知県と首都圏では、**企業の卒業生に対する期待に大きな違い**がみられた。
 - 卒業生・企業が大学教育に求めることも、高知県と首都圏では異なっている。
 - 高知では、「**人間としての幅を広げる・人間力を高める**」ための経験・学びへの要望が高い。
 - 首都圏では、「**職場で求められるスキル・能力につながる**」ための経験・学びへの要望が高い。
- ▶ “**高知流人材育成**”は、地域活性化の取り組みを検討する上で注目すべき要素。

高知大学の就活指導の課題

- ▶ 高知県企業から、高知大学の**就活指導への積極性に対する指摘**があった。
 - 就活スタートが早い積極的な学生ほど、首都圏など県外へ流出している可能性がある

インタビュー調査結果（社会での活躍を支える大学時代の学び・経験）

🗨️ 現在の活躍に貢献していると感じる大学生活の学び・経験

●資料を集めてそれを欲しい順に並べ直す、必要なら図を入れる、ということを卒論で経験した。どのような図を作ったらわかりやすいのかというのも、自分でやったことがあるので知っていた。通常のレポート課題の経験も役立ったが、卒論は特にまっさらな状態から、自分で何をしたいのか、どういう情報を引っ張ってきたら自分の欲しい答えが出るのか、というのを探すところからであり、それは初めてだったのでより勉強になった。卒論を書き切ったというのは自分の中での誇りになった。（K10文系）

●論理的思考力や自主性は、大学で身についた部分が多いと感じる。大学の中でも相当厳しいゼミに所属していて、色々な指摘を率直に言ってもらえた。今になればあの時の経験や助言が大きかった。卒論のテーマ決めの時から、「そのテーマで卒論を書いたら大したレベルにならない、または行き詰まる」と言われ、先生を納得させるためにいかに論理的に背景や仮説を踏まえてテーマを設定するか、先生に認めてもらうのに1年ぐらい費やした。（S07文系）

●教育実習を受けたことは非常に大きな経験だった。「教育実習だから責任がない大学生」ではなく、少しでも子供と接する以上、下手なことではいけない、お手本になるよう行動しなければいけない等制約もあるし、責任が生じる。働きながら生じる責任というのを学生の段階で知ることができた。（K13文系）

●3年生からのゼミ活動で、怒田で農業の手伝いをした。活動にあたっては、教える方も、こちらが元気でハキハキしている方が教えやすいだろうし、販売するにも売れるように役に立てるように、元気な方がいいと思う。（K15文系）

相当の努力をして課題（単位取得や論文作成）をやりとげる厳しさがあった

実社会との接点を感じることができた

インタビュー調査結果（社会での活躍を支える大学時代の学び・経験）

現在の活躍に貢献していると感じる大学生活の学び・経験

●実験などをする時に、**どういうことが予想され、どういう結果が生まれるのかを先に考えてから行っていた**が、現在の仕事は論理的思考が大切だと思うので、その経験が今後いきてくるのではないか。（S10理系）

●知識の面では、**経営学・経済学のスキル**は、営業する上でマーケティングをする必要が出てくるので役立っているのかなと思う。（S09文系）

●ゼミは、「なぜゼミ」というのがあり、**ものごとに対して「なぜ、なぜ」と繰り返し考える**。そんな感じで、例えば、「どうして介護の仕事をするのか」に対して、大体は「感謝される」「高齢者の役に立つ」など「誰かのために」と答えるが、本当は「自分のために」が一番の理由ではないか、といったことをよく考える方だ。（S04文系）

●SBIで「**どの仕事も、人の役に立つからある**」と気づき、**どういう人にどう役に立ちたいのか考えるべきだなと感じた**。インターンシップ行くことを決めたのは先生のゼミを受けたことがきっかけだった。夏休みでの参加は面倒で行かなかったが、「行かないと後悔しそうだな」と冬休みのプログラムに参加した。（K15文系）

●**室戸岬のジオパークなど、自然豊かで他には見られない褶曲や化石など、研究資料が多い環境で実験や実習**ができるのがドキドキ・ワクワクした。（S10理系）

学問固有の物の見方や考え方に触れられた

大学の個性や特色をいかした教育を受けられた

インタビュー調査結果（社会での活躍を支える大学時代の学び・経験）

現在の活躍に貢献していると感じる大学生活の学び・経験

●実家周りにお年寄りには特になかったが、大学時代に授業で集落に行った時にお年寄りとは違和感なく話せる自分に気付いた。この経験は、結果的に介護職に進むひとつのきっかけになったと思う。（S04文系）

●大学時代の周りの人の考え方に刺激されて自分の考え方が構築された。それまではそこまで前向きではなかったが（高校時代は閉鎖的だった）、刺激を受けて自分から飛び込んで色々な人と知り合い色々な経験を聞いたりできたりしてよかったと思っている。今も英語の勉強をしたり資格を取ったり、社会人サークルに自分で連絡を取って行ってみたりしている。東京には知り合いもいないので、自分から動かないと繋がりもできない。（S06文系）

自分の適性や将来への関心を知ることができた

➤ 5つの要素 + それを支える人の存在が確認された。

⑥教育実践・施策への反映

アセスメント・プランの明確化

●評価の目的の明確化と尺度の共有

育成すべき人材像や評価の尺度・時期を明確に学生に示すツールや手法の開発を行うとともに、自分を客観的に評価できる学生を養成する。

●リフレクション面談（形成的評価）の実施

多面的に行う評価（自己評価・他者評価）の乖離を埋めるために、全学的な修学支援としてリフレクション面談を実施する。リフレクション面談では、学生の目標設定、各種アセスメントをもとに、将来のキャリアも視野に入れた形成的評価を行う。

卒業後のキャリアの観点から学修成果を可視化する量的調査

●ex. 「県外出身者8割」の再検討

県内進学者が2割強という指標は、従来から本学の大きな課題であった。しかし、多様性の理解という大学教育の目的のひとつに照らしてみれば、重要な資源と考えられなくもない。労せずしてコミュニケーション力や協働実践力を育成できるオーセンティックな環境としてこの現実をとらえることはできないか？

就職支援への対応

●リフレクション・セメスターの実施

3年次1学期をリフレクション・セメスターと位置づけ、将来のキャリアを見据えた学生の振り返り期間とする。リフレクション・セメスターとリフレクション面談を学生のキャリア形成のよこ串として、4年間を通じたキャリア支援のプログラムを開発していく。